

2014 年に相模原市内で越冬したウタツグミの観察記録

坂本 堅五

Kengo Sakamoto:
A Record of Song Thrush *Turdus philomelos* in 2014 Winter Season in
Sagamihara City, Kanagawa Prefecture

はじめに

ウタツグミ *Turdus philomelos* は、ヨーロッパからバイカル湖付近にかけて繁殖し、ヨーロッパ北部からシベリアのものはヨーロッパ南部・アフリカ北部・小アジアで越冬する（五百沢，2000）。日本では、迷鳥として 1987 年 11 月に横浜市栄区で観察されたのが国内初記録で、近隣では 2006 年 11 月に東京都江戸川区で記録されている（日本野鳥の会神奈川支部，2013）。また、環境省の鳥類標識調査では、2011 年 10 月に北海道根室市川口で、2012 年 11 月に広島県呉市郷原町で、2012 年 10 月に福井県丹生郡でそれぞれ標識放鳥されている（山階鳥類研究所，2014）。

筆者は、2014 年 3 月～4 月に本種 1 個体を相模原市内の相模川自然の村公園にて観察したので報告する。

観察地および観察の経緯

ウタツグミを今回観察した場所は、相模原市の北西部の相模原市緑区上大島地区で、相模川上流部左岸に位置する相模川自然の村公園である。面積は 4.72 ha，広い河原から河岸段丘の斜面雑木林まで、キャンプ場・芝生・畑・花畑・サクラ林・水路・古民家など自然とふれあう市民の憩いの場となっている。この園内の東側，段丘斜面のコナラ・ケヤキなどの広葉樹林を背に芝生に河津桜約 20 本が植栽され，この場所を中心に当該個体が生息していた。

観察の経緯は，新聞（朝日新聞、2014 年 3 月 5 日さがみ野版）にウタツグミとみられる鳥が飛来した報道がされ，翌日 2014 年 3 月 6 日と 3 月 31 日，4 月 7 日，4 月 14 日に現地に行き，観察・撮影を行った。全国から大勢の観察者・カメラマンが集まっていたが，観察可

能な場所の確保と長時間の出現で観察・撮影ができた。

観察方法

観察方法は，目視および双眼鏡（8×40），300 mm 望遠レンズ付き一眼レフカメラによる写真撮影によった。調査中の当該個体との距離は 20 m～30 m 前後であった。

形態と行動

ウタツグミの当該個体の大きさは，近くで行動していたツグミやシロハラよりやや小さく，このことから類似種のヤドリギツグミではないと確認できた（図 1）。体色は，上面が緑がかった褐色で，下面は黒褐色の矢じり形の斑のある淡い黄色がかった白色であった。この斑は下部まで太いので成鳥と思われる（Rob, 1981）（図 2）。雌雄は不明である。

当該個体は，観察されたほとんどの時間をサクラの木の下で過ごし，時折，近くのスイセン畑など開けた場所に移動，昆虫やミミズなどの採餌や休息を行っていた。ツグミやシロハラから威嚇され，追われることも多かったが，遠巻きにしている観察者・カメラマンはあまり警戒していなかった。前述の新聞によると，2014 年 2 月 26 日に近くの野鳥観察者が当該地でこの個体を初確認している。その後，筆者らも同年 4 月 7 日まで生息を確認したが，4 月 14 日には生息が確認されなくなった。当該地域での複数の観察者の情報などから 4 月 12 日までいたことがわかった。

考察

ウタツグミの当該個体は，この場所に少なくとも 2014 年 2 月 26 日から同年 4 月 12 日まで 46 日間いた



図 1. 相模原市のウタツグミ(右)とツグミ(左)(2014年3月6日撮影)。



図 2. 相模原市のウタツグミ(2014年3月6日撮影)。



図 3. 今回観察したウタツグミの尾羽。

ことがわかった。

本種は、日本鳥類目録改訂第7版(日本鳥学会, 2012)の本文に掲載されていない種であるが、Appendix Bに「検討中の種・亜種」として掲載されている。日本鳥類目録に掲載されない理由は、①論文、または十分に識別できる写真を掲載した刊行書籍等として

公表されていないこと、②自然分布とするには疑問がある種のうち、飼育個体からの逸出の可能性が極めて高いと判断された種、などであると思われる(池長ほか, 2014)。しかし前述したとおり、近年の2011年10月、2012年10月、2012年11月に続けて国内での標識放鳥が記録されており、標識記録には野生種であるという明確な記載はされていないが、①捕獲時期がいずれも10月～11月の移動時期と思われる時期に集中していること、②捕獲場所が地域的に分散していること、③広島県と福井県の個体については写真が掲載されており、飼育個体によく見られるような極端な尾羽などの擦れも見られないこと、などからこれらの種は飼育個体からの逸出種ではなく野生種の可能性が高いと思われる。これらの判断から、これまで希にしか記録されなかった当該種の野生種が見られることは十分にあると思われる。今回観察された個体は、①春の渡りの時期に姿を消したことから、冬鳥の一般的な移動のタイミングに合致すること、②飼育個体には、尾羽全体の先端から1～2 cm程度が擦れて摩耗しているなど極端な尾羽の擦れが見られることがあるが(キットウココ, 2014)、今回観察した個体には擦れが見られなかった(図3)ことから、当該種は自然分布の個体である可能性がある。日本におけるウタツグミの自然分布の可能性を精査するため、今後も渡来記録を丹念に蓄積する必要がある。

謝 辞

報告にあたり、ご指導ご助言をいただいた日本鳥学会日本産鳥類記録委員の柳澤紀夫氏に感謝の意を表する。また、査読をしていただいた相模原市立博物館の秋山幸也氏および編集委員の皆様にも厚く御礼を申し上げる。

引 用 文 献

- 池長裕史・川上和人・柳澤紀夫, 2014. II. 日本鳥類目録改訂第7版で「検討中」とした種および亜種について. 日本鳥学会誌, 63(1): 134-149.
- 五百沢日丸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.190-196. 文一総合出版, 東京.
- キットウココ, ペット部. KOT-387 スペイン「ウタツグミ」1羽の価格. http://kittou-pet.jp/products/detail.php?product_id=266 (accessed on 2014-November25).
- 日本鳥学会, 2012. 日本鳥類目録改訂第7版, pp.406-408. 日本鳥学会, 三田.
- 日本野鳥の会神奈川支部, 2013. 神奈川の鳥 2006-10. pp.183-185. 日本野鳥の会神奈川支部, 神奈川.
- Rob, H., 1981. Usborne Guide to Birds of Britain & Europe, pp.96. Usborne Publishing Limited, London.
- 山階鳥類研究所, 2014. 2012年鳥類標識調査報告書, pp. 42-43. 山階鳥類研究所, 千葉.

坂本堅五：海老名市今里 3-11-27